

学生時代と図書館 39

「入り口でつまづいた私の図書館利用」
下村 秀則

学生時代図書館とは縁が薄かった私にとって本稿の執筆はいささか面映ゆい感じがするが、反省の意味も込めて当時を振り返ってみたいと思う。

私が京都での学生生活を始めたのは1969年（昭和44年）4月である。高校時代から下宿生活をしていたので親元を離れての一人暮らしには慣れてはいたが、信州から遠く離れた京都での学生生活には何かしら胸がときめき、大いに張り切っていた。それまで読書の時間があまり取れなかったこともあり、入学を決めると早速本屋に行って高校の恩師から薦められ心に残る一冊となった五味川純平の『人間の条件』を買い求めた。また、入学する前に何とか英語の力を少しでもつけておきたいと思い、『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』などの作品で知られるロバート・L・スティーブンスンの短編集を購入し準備に取り掛かった。

ところが、胸を膨らませて門をくぐった大学に程なくして出鼻をくじかれる出来事が起こった。前年の全共闘による東大の安田講堂占拠（昭和44年3月実施予定の東大の入学試験が中止になるという異例の事態に発展した）に端を発し全国に広がった学生運動の煽りを受けて学内は俄に騒然とし、大学当局と学生自治会との「大衆団交」がたびたび繰り返される中で授業のボイコットが行われ、やがて大学が全面封鎖されてしまったのである。

こういった状況の中で、いきおい社会問題にも一人前の関心を寄せるようになり、友人達とも下宿で夜を徹してよく議論をした。授業再開の見通しが立たないまま、今と違ってテレビもない下宿では、本でも読むしか時間の潰し方がなかった。学生運動に積極的に関わる気持ちはなかったが、同世代の学生達の議論に後れを取りたくはないという多少の自負心と、『人間の条件』に触発された人間の生き方に対する強い関心から、気負いも手伝って随分背伸びをしながら様々なジャンルの

本をせっせと買い込んだ。生活費をかなり削っていたにも拘わらず、このとき図書館の利用は全く視野に入ってこなかったし、物理的にも当然不可能だった。



大学紛争も収まり、緊張感の薄れた学生生活を送っているうちにあっという間に4回生になっていた。ゼミでは、3回生の時にたまたま興味深く読んだ短編集によって知るところとなったトマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』を卒論のテーマに選んだ。一般的なものは別として一通りの研究書に目を通すには個人では当然まかないきれず、ようやく図書館のお世話になることになった。この時に英国文化センターにも出向いたのを記憶している。

大学院に進学し、2年目の9月に第一回目の派遣留学生として財団法人日本国際教育協会からの奨学金でサンフランシスコ州立大学に留学することになった。当初は寮生活をしながら大学に通っていたが、ここでは日本と違い図書館をよく利用した。授業の課題として、図書館のリザーブセクションというコーナーに用意されている指定図書や論文を読むことが義務づけられていたからである。持ち帰り禁止のために、一人一回2時間という時間制限付きだったので、時間内に読み終えることができずに、借り出しては返し、また借り出すということをしばしば繰り返した。課題図書に限らずアメリカの大学の学生たちは図書館の本を利用するのが常態で、われわれのように個人で多くの本を所有している者は私の友人達の中には一人もいなかった。心のおもむくまま自由に本を手にとって見ることができ、ゆったりと読書ができる空間は確かに居心地がよかった。

このように、私は、図書館の良さや利用価値に気づくのが少し遅かったけれども、新入生の皆さんには一日でも早く図書館と仲良くなって、豊かな知識を得られることを切に願っています。

しもむら ひでのり（教授・英語教育）